

礼についての考察

上村 雅彦

創立百二十周年記念『第五十三回全国武徳祭』が盛大に、且つ事故もなく無事終了出来ましたことを大変嬉しく喜びを感じます。

武徳祭の運営に多大なる御尽力頂きました先生方に心から御礼申し上げます。

またこの大切な行事に私めに「実行副委員長」のお役をいただきましたにもかかわらず、数々の至らぬ点を残してしまいましたこと、深くお詫び申し上げます。

今回の全国武徳祭におきまして各団体先生方の素晴らしい演武を拝見し、厳しい鍛錬のもとに達せられる妙技に改めて大変感動致しました。また、技の素晴らしさとともに本当はとても大切な事であるにもかかわらず他所では見受けられなくなってきた素晴らしい『礼』の所作を拝見しました。

改めて大日本武徳会の本来武道家として忘れてはならない本質を演じていらっしゃる先生方の素晴らしさに私も誇りを感じました。

「武は 礼 に始まり 礼 に終わる」
と云われますが、何故礼なのでしょう。

剣においての実戦の場合、刀に例えますと鞘からの抜き方と納め方が大切だと考えられます。

何故抜くのか。

どの場面で納めるのか。

始まり方と終わり方を間違えたと闘いが和合となるか、遺恨として残るものか違ってきます。

これが国家間の戦争で例えますと、最終は国同士が和平し終戦となります。そうでなければ遺恨を残し、酷くなればテロリストが闘いのような報復措置を企てる事となりかねないでしょう。

しかるに相手のことを重んじる態度や尊厳を伝える気持ちを示しながら正々堂々と闘い、和をもって終と成すことが最も大切でありますから、**礼**が武道にとって最も重要なのだと私は考えます。

武道を稽古します**道場**とは**道**の**場**と書きますから、人としての**道**の探求が最も必要な事でありましょう。そうでなければ粗暴な輩の輩出場となりかねません。

以前、あるテレビ番組の企画で外国の武道家が紹介されました。その方は毎年、二回ほど日本に來られて薙刀を稽古され、自国の道場において日本で修練された薙刀を指導されているとの事でした。

インタビューされている方が最後に「薙刀のどこに魅力があるのですか」と問われますと、「試合の最初と最後だけを見ていますと、どちらが勝ったのか負けたのか判らない。そこに魅力を感じます」とお答えになりました。見ていた私は、道を逆に教わったような気持ちにさせられました。

勝つて傲るわけではなく、負けて悔やむわけでもない、相手に対する礼儀を尽くすことが、我々日本の武道家が示すべき態度であり、「一般社団法人大日本武徳会」先生方の素晴らしい**礼**が今後も世界中の武道を志す人々の良き指針となり続けますことと考えられます。